

『#神の火』（高村薫著、1995年）を読んだ。著者は、1990年『黄金を抱いて翔べ』で日本推理サスペンス大賞を受賞。1993年『リヴィエラを撃て』で日本推理作家協会賞、日本冒険小説協会大賞を受賞。同年『マークスの山』で直木賞を受賞する。1998年『レディ・ジョーカー』で毎日出版文化賞を受賞。2006年『新リア王』で親鸞賞を受賞。2010年『太陽を曳く馬』で読売文学賞を受賞する。他の著作に『照柿』、『晴子情歌』などがある。

2011年3月には、テロリストの攻撃を待つまでもなく、津波による核攻撃を受けて、東日本は取り返しのつかない被害を受けてしまった。本書は30年前の原発襲撃プランに関する話である（著者は当時ここまでの災害被害は想像しなかったであろう）。本書は、冷戦末期の原子力技術とスパイ活動を背景に、「原子力という人類が手にした神の火の意味」と、時代の激流に翻弄される人間の生き方・贖罪を描いた作品である。著者は、人間が作り出したこの「火」をどう扱うべきかという倫理的問いを読者に突きつけている。現在はドローンで上空から原発を襲撃される危惧がTVで報道されている。

原発技術者だったかつて極秘情報をソヴィエトに流していたS。謀略の日々に訣別し、全てを捨て平穏な日々を選んだ彼は、己れをスパイに仕立てた男と再会した時から、幼馴染みのHと共に、謎に包まれた原発襲撃プラン「トロイ計画」を巡る、苛烈な諜報戦に巻き込まれることになった。

「トロイ計画」の鍵を握るマイクロフィルムをSは入手した。CIA・KGB・北朝鮮情報部・日本公安警察という4国の諜報機関の駆け引きが苛烈さを増す中、彼は追い詰められてゆく。最後の頼みの取引も失敗した今、彼とHは、プランなき「原発襲撃」へ動きだした。完璧な防御網を突破して、現代の神殿の奥深く、海から攻め行つて、静かに燃えるプロメテウスの火（原発）を破壊し「神に火を返す」という行為が描かれる。

様々な人物（スパイ）が登場し、ジョン・ル・カレの小説を彷彿させる。現場の詳細を語る科学的な姿勢は相変わらずで、衰えることはない（これについてゆけず読了できない読者もいるようだ）。

原発は陸海空ともに厳重に警備されているが、近年はドローンの進化により「空の死角」が生まれ、監視や防御が難しい状況が指摘されている。ドローンは偵察や妨害、さらには攻撃に利用される可能性があり、原発の安全性に新たな脅威を

もたらしめている。

原発の安全性の基本

- ・日本の原発は 陸上・海上・空からの侵入を想定した多層防御を敷いている。

警察の「原発特別警備部隊」が 24 時間体制で監視。

海上保安庁も沿岸警備を強化し、武装巡視船を配備。

- ・法律上も「小型無人機等飛行禁止法」により、原発周辺でのドローン飛行は原則禁止されている。

ドローンによる原発襲撃の懸念

- ・玄海原発（佐賀県）で 2025 年 7 月に「三つの光」が確認され、ドローン侵入の疑いが浮上。監視カメラに記録されず、操縦者や目的は不明のまま。

- ・ドローンは以下のようなリスクを持つ：

偵察：冷却施設や送電設備の配置を把握。

妨害：通信や監視機器を無力化。

攻撃：爆発物搭載による直接破壊。

- ・シミュレーションでは、仮に原発が攻撃を受けた場合、最大 949 万人が避難を余儀なくされる可能性があるという報告されている。

国際的な事例と背景

- ・ウクライナではロシア軍による原発へのドローン攻撃が報告されており、国際的にも現実的な脅威と認識されている。

- ・韓国や欧州でも原発周辺で不審ドローンが確認されており、各国は「多層防御」や電波妨害装置などの対策を強化中。

日本の課題

- ・現行法は「禁止」規定はあるものの、強制力や即時対応力に限界がある。
- ・原子力規制委員会や警察、自衛隊の役割分担が曖昧で、責任の所在が不明確との指摘。
- ・技術的には、ドローン検知レーダーやジャミング装置の導入が進められているが、コストや運用面で課題が残る。

評価：★★★★☆